

神戸大学 大学教育推進機構 大学教育研究

第 16 号 (2007 年度) 2007 年 9 月 30 日発行 : 81 - 92

若者にとってキャリアとは何か (その 2)

山内 乾史

若者にとってキャリアとは何か（その2）

山内乾史（神戸大学大学教育推進機構）

本稿では、前稿に続き、若者とキャリアの関係について論じたい。今回は世代論の観点から筆者の世代を中心として論じたい。

4．1960年代生まれは偉かったのか 共通一次試験とパンク・ロック

世代をどう区切るかは難しいところで、いろいろな議論があるだろう。世間では、筆者の世代は新人類と呼ばれることが多かったように思う。あるいは安倍晋三前首相が著書『美しい国へ』（文芸春秋社、2006年）で述べている「シラケ世代」という言葉も筆者たちに対してよく使われた。筆者たちも先生や同級生のくだらないギャグに「シラー」、「ビシー」とヤジを飛ばしたものである。逆に冴えた感覚のものには「イカす」、「ナウい」などと言っていた。いずれにせよ、10年ほど上の団塊の世代と比べて、「訳知り顔で怒らない羊のような若者たち」、というイメージが一般的であったように思う。

ただ、ここでは少し見方を変えてみよう。筆者も共通一次世代に属している。この共通一次世代は現在40代半ばから30代後半くらいになっており、各界でかなり発言力を増している。フリーター、ニート問題に関して盛んに発言している論者にもこの世代の人が多く見られる。玄田有史氏や本田由紀氏もそうである。

ちなみに共通一次試験とは何かについて念のため、説明しておく。現在行われている大学入試センター試験の前身は共通一次試験と呼ばれていた。この試験は1979年から1989年まで実施されている。筆者は制度導入後四年目の受験生であった。共通一次試験は、センター試験と異なり、全員が五教科七科目1000点満点で受験していた。しかも制度導入の初期においては、各大学で独自に行う二次試験よりも共通一次試験を重視する大学が多かったのが特徴である。もっとも、そうは言っても、東京大学などは、一次試験は110点、二次試験は440点であった。他にも一橋大学など関東は関西よりも二次試験重視の大学が多かった。それに対して関西は京大、阪大、神大はじめ、ほとんどの大学が共通一次試験重視であった。筆者が阪大を受けた時は、文学部以外の文系に関しては共通一次が1000点、二次試験が600点であった。ちなみに京大は文学部以外の文系では共通一次700点、二次試験450点であったし、神大は文系では共通

一次575点、二次試験275点であった。

共通一次試験に対しては、とかく批判が多かった。とりわけ、マークシート方式という、まだ当時ものめずらしかった回答方式が、若者の思考様式を単純化するとか、様々な批判が寄せられた。しかし何よりも問題だったのは、猫の目のようにマイナー・チェンジが相次いだことである。試験問題の内容や試験形式に関する批判があると、そのたびに批判を受けてマイナー・チェンジするわけであるが、そのこと自体がまた批判の種になるのである。受験生の立場から言えば迷惑という他なかった。

筆者の受験した第四回目でも、すでに第一回目の受験生と比べていろいろな変更があった。社会科では地理、世界史、日本史、政治経済、倫理社会から二教科選択だったが、政治経済と倫理社会だけが（暗記すべき事項の量が少ないせいもあって）際だって平均点が高かったため、政治経済と倫理社会を二科目とも選択することはできなくなってしまった。どちらか一つだけということになったのである。これが最も大きな変更点であった。教科間の平均点が大きく異なるのはダメということである。他にもあまりにも可視的で一元的な入試システムになったとの批判を受けて、筆者が受験する頃には枝間の細かい配点は明示しないということになってしまった。例えば問1は全体で20点だが、問1の中に4問小問がある。それは各5点なのか、そうではなく、特定の一問だけが8点で他の設問は4点なのかかわからないということである。したがって不正確な自己採点しかできなくなってしまった。自己採点の結果を基にして、より適切な大学・学部選びができるというのが共通一次試験のメリットとして喧伝されていたのに、である。姑息な小手先の変更というべきであろう。

さて、共通一次世代は、上の団塊の世代、下の団塊ジュニアの世代と比べてどのようなライフコースを過ごしてきたのか。

筆者たちの世代は、（男の子は）幼少期に「ウルトラマン」が放映され、GSがブームになり、小学生時代に「仮面ライダー」が放映され、TVから多大な影響を受けた人が多い世代である。だが、何よりも高度経済成長期に小学生時代までを過ごした経験を持っている。この時期は子どもを取り巻く各世界も、偉大なヒーロー・ヒロインがひしめいていた時代であり、野球界はON（王貞治・長嶋茂雄）を中心とする読売巨人軍のV9時代、芸能界は石原裕次郎、美空ひばりなど、巨頭が活躍していた。マンガ界でも手塚治虫や梶原一騎、藤子不二雄、石森章太郎（現在では石之森章太郎）などの現在は神話化されている巨人が現役で活躍していた。筆者の個人的感覚で言えば、とにかく明るい時代であった。とはいえ、バブル期の頃のような軽佻浮華な明るさではなく、もう少し地に着いた明るい時代であったように思う。1974年のオイル・ショ

ックともに、高度経済成長期は終焉を迎える。上述の時期はちょうど、佐藤栄作（前首相安倍晋三氏の大叔父）政権の時期とほぼ重なっている。

他方、この時期は毎年のように、社会を揺るがす出来事・事件が相次いでいた。筆者の生まれた1963年には吉展ちゃん事件、狭山事件、ケネディ大統領暗殺、1964年東京オリンピック、1965年相次ぐ飛行機事故、1966年朝永振一郎氏ノーベル賞受賞、ピートルズ来日、1967年GSブーム、羽田事件、1968年金き老事件、札幌医大和田心臓移植、学園紛争、三億円事件、1969年永山則夫事件、東大安田講堂攻防戦、アポロ11号月面着陸、1970年よど号ハイジャック、大阪天六ガス爆発、プロ野球黒い霧事件、三島由紀夫割腹自殺、大阪万博など……。あるいは深刻な公害、薬害、交通戦争もこの時期大問題になった。

特に筆者に大きな影響を与えたのは三島由紀夫の割腹自殺であった。父親が文学者であった関係もあり、三島由紀夫の名前は小学校一年生の私もよく知っており、「おはなしをかくひと」ということは理解していたように思う。しかし、一方で、なぜ「おはなしをかくひと」が自衛隊で演説をして割腹自殺しなくてはならないのか、その論理が全く理解できていなかったとも思う。現在、三島由紀夫の全集は筆者の最大の愛読書で、再読三読しているが、島田雅彦のいうように、三島由紀夫を「そういう死に方をした人」と位置づけ、そこから遡るように過去の作品を読んでいったという感じがする。いずれにせよ、11月25日という日付と45歳という年齢が深く私の心に刻み込まれてしまった。今の私はちょうど三島由紀夫の享年と同じ年頃になっている。

しかし、このように大事件が相次ぐなかでも、日々生活が良くなっていく、便利になっていくという感覚は基本的に一貫していた。今のような長期にわたる閉塞感、これから先どうなるのかという危機感は、今ほど多くの人にもたれてはいなかったようにも思う。

日本からイギリスに目を転じてみよう。当時のイギリスの状況は日本とは逆であった。長期の経済的失速、斜陽化は英国病と呼ばれた。みな在りし日の大英帝国の栄光を懐かしみ、活力を失った祖国を嘆いていた。パンク・ロックが登場するのはこの時期である。

1975年にイギリスはロンドンのチェルシーにあるブティック「セックス」からセックス・ピストルズが登場し、パンク・ロックがイギリスで一ムーブメントになった。ピストルズに続いて、クラッシュ、ストラングラーズ、ダムド、スージー&パンシーズなどがデビューし、アメリカ合衆国でもラモーンズ、ニューヨーク・ドールズがデビューした（ブロンディもパンクと考える向きもある）。これらのバンドの多くは、

義務教育を修了して世に出ても仕事もないという社会状況をあからさまに告発し、怒りを発散していた。

1976年には日本にもパンク・ロックの存在が広く知られるようになる。今考えればおかしいが、あれほど挑発的で過激な詞が、英語だというだけの理由でノーカットで放送されていた。後に日本でパンク・バンドの草分けアナーキーがデビューした時には、いくつかの曲の中核的な部分(おそらくは皇室を揶揄している部分)に「ブー」音が入っているのと対照的であった。

このパンク・ムーブメントが上陸した頃、筆者は中学に入学していることになる。私は、最も多感な時期にパンク/ニューウェーブ(ニューウェーブとは現在も活躍しているスティングのいたポリスやエルヴィス・コストロに代表される1970年代中期の音楽的潮流である)の洗礼をモロにうけることになった。私は一気にロック少年になった。もともとすでに幼稚園の頃、日本のGSでは優等生的なタイガースよりも、少し不良っぽいテンプターズが好みにあった。また、長じて聞くようになったいわゆる洋楽でも、ビートルズよりはローリング・ストーンズの方がはるかに筆者のテイストに合った。愛とか恋とかうたったものよりも、大人の抑圧や体制に対する反抗的な音楽が好みにあったという訳である。音楽的に言えばR&Bということになるだろう。さらにパンク・ロックから遡って聞くようになったフー、キンクス、ヤードバズ、クリーム、ドアーズなども大変好みにあった。

日本でも影響を受けてパンク・バンドが登場するのは1980年代である。代表的なパンク・バンドとしてアナーキー、ラフィン・ノーズがある。他にもスターリン、ガスタンクなども当時の有名なパンク・バンドであった。これらのバンドはいずれも1980年代にデビューして共通一次世代が中学生の頃から社会人デビューする頃までの、思春期、青春期をおおっている。今の若い世代にとってアナーキーやラフィン・ノーズは、ブルー・ハーツほどなじみがないであろう。彼らが現役ばりばりでプレーしていた頃、音楽性・芸術性よりもむしろ、反社会的な言動や服装、不祥事によって世間に知られていたように思う。筆者自身振り返ってみても、パンク・ロッカー達はわざと不明瞭な発音で、しかも巻き舌でまくし立てるように歌うケースが多いため、当時歌詞を十分正確には理解しておらず、雰囲気だけでしか理解していなかった向きがある。

ラフィン・ノーズの初期の(イントロが印象的な)ナンバー「ブローケン・ジェネレーション」にはイギリスでよくいわれるところの「奴らと俺たち」なるものが歌詞に見られる。アナーキーはとりわけ幼稚なまでにシンプルで挑発的な歌詞が多いのだが、デビュー・アルバム中の「3・3・3」に「世間の目を気にしていたんじゃ好き

な事もできない。やりたいと思っていることは気にしないでやればいいさ。」(アナーキー 3・3・3(1980))という一節がある。また少し後にデビューする、パンクな香りのするバンド、パーソンズにも「Freedom World」の中に「やけにシリアスタッチの顔して、誰かのひいたレールの上歩いていちゃつまらないでしょう。」(1987)という一節がある。

イギリスのパンク・ロッカー達は義務教育を終わって社会に出て仕事がなく、いきなり失業状況におかれる、重症の「英国病」に蝕まれた社会構造の問題点を告発するという主題があったのに対して、日本のパンクロッカー達は「決められたレールの上をひたすら歩くだけでいいのか。やりたいことはないのか。自分らしさはないのか」と遮二無二挑発するように聞こえる。われわれの世代は、何をやりたいか一生懸命になって考えなくても、何とかなる時代だったのではないのだろうか。強固なレールがあり、レールの上を走っていればそれでよく、むしろあれこれ思い悩むことはマイナスにしかならなかったのではないのか。そのレールの始まりが学校で成功することである。

しかし、「おまえら、本当にそれで良いのか」とパンク・ロッカー達は挑発したわけである。レールの行き先は見えているじゃないか、そんな仕組みられた人生、つまらないじゃないか、というわけである。社会の最も大きな問題点、告発すべき不条理は、日本においては個々にあったというわけである。

当時、英国病に対して、日本では学歴病などという言葉も生まれた。学歴は第二の出生などとも言われた。当時、大学院はまだ一般的であったわけではなく、大学が最高学府として最終的な目的地であった。その大学進学を左右する共通一次試験であるからこそ、「不平等、理不尽」という声が挙がるたびに、制度を猫の目のように変えてまで平等性を担保しようと図られたのである。

5. 筆者の進路選択

さて、ここで世代論ではなく、より個人的なレベルの話をしておきたい。筆者は、小さい頃から大学卒業頃まで、将来は高校教師になろうと漠然と考えていた。筆者が生まれた時、父は大阪府の某女子中・高等学校の国語教師をしていた。母も兵庫県のとある女子高等学校に英語教師として勤務していたが、結婚を機に退職した。父は筆者が生まれた直後に兵庫県の某中・高六年一貫の女子校の教師となった。この環境下で、私は教師になろうと小さい時から決めていたように思う。小学校三年生終了時のクラスの文集をみると、「将来つきたい職業」に教師、「将来行きたい都市」にパリ

をあげていた。父は小学校四年になる時に同じ学校法人の大学に移ったが、相変わらず私は高校教師をめざしていた。このころの将来いきたいと考えていた第一志望大学は東京教育大学（現在の筑波大学）であった。父が中高教師の頃は毎日朝早くから出勤し、夜遅くまで働いていたのに、大学に勤めるようになって出勤日数が減り、出勤した日も早く帰ってくるようになったので、私は国語を始め主要教科をみっちりしぼられるようになった。4年生ではじめて通知簿に「5」をもらった。もらったのは苦手科目のはずの社会科で、怪訝な気持ちに包まれまたのを覚えている。4年生の二期からは近隣では大変有名なスパルタ式のU塾に放り込まれた。そこは当時の受験競争の激しさを強調するために映像でしばしば紹介されている塾の典型的なもので、超スパルタ式であった。入塾試験も厳しく、成績不良の者には容赦なく退塾命令が出た。みな、自分の学級では一番か、せいぜい二番という成績なのに、である。塾頭が故意に子どもの心を傷つけるような発言（今なら、例え塾でも問題になるような）を連発するだけでなく、父兄までもみんな容赦なく罵倒した。筆者もさんざんこきおろされた。

当時は、毎週のように芦屋教育研究所や育英会の模擬試験が日曜日にあり、ほとんどすべて受けさせられていた。結果として、U塾生の半分は神戸市・阪神間の名門校X校に進学し、残りのうち、さらに半分はやはり名門のY校に行った。私は7人の仲間とともにある私立六年一貫校Z校に進学した（つまりU塾では平均以下の出来だったということ）。近隣の名門校同様、Z校もまた男子校であった。そこは何ともぬるま湯の世界で、近隣の名門校とは異なり、「何が何でも××大学へ！」という必死さには欠けていた者が多かった。しかし、現在のZ校の状況は知らないが、筆者の在学中は学年で半分以上の位置にいれば、東大、京大、阪大、神大、一橋大、東工大（6大学と称して進路指導主任が重点を置いていた）のどこかに行けると言われていたし、実際そうだった。ただ、われわれの中高時代は、まだ関西人の関西への愛着心はかなり強く、例え、東大、一橋大、東工大に行ける学力があっても、関西の同程度の大学に進学するという者が同級生には圧倒的に多かったように思う。必死さが足りないことの結果とも言えると思うが・・・。

筆者はずっと京大理学部をめざしていた。天文学か宇宙物理学をやりたいかったのである。クラブでも天文観測をしていた。クラブでよく学校に宿泊し、また休暇になると学校の臨海学舎がある京都の久美浜や、林間学舎のある立山へ合宿に行き、夜通し星空を見てスケッチした。その延長上に自分の大学生活を描いていたように思う。読む本も文学書とブルーバックスや『NEWTON』のような自然科学系の雑誌ばかり

であった。

得意な科目は数学と国語であった。数学は、毎日こつこつといくつかの参考書を勉強し続け、6年間やり通した。国語は、小さい時から日本文学が大変に好き（外国文学はまったく肌に合わない）で、小説ばかり読んでいたから、その影響かと思う。しかし、英語と理科が嫌いではないが苦手で、この得意科目と不得意科目の組み合わせでは何とも進路を決めにくい、というのが正直なところであった。

実は京大理学部にしたのは、二次試験の理科が一教科で、しかも得意科目の国語（ただし古文は苦手）があるということも一因であった。しかし、どうも理科が好きなのに点が伸びず（特に物理）、嫌気がさして文系に転じることを決意した。

筆者の親友がやはり京大理学部をめざしており、彼の頭の構造は並はずれており、どう考えても自分とは違うとしか思えず、「こういう奴が行くのなら、俺には努力しても無理だ」と思ったのも一因である。後に彼の結婚式で、彼の京都大学時代の友人と同じテーブルになり話したところ、「あいつをみて大学院に行くのをやめた。研究者の道を諦めた。」と、筆者の昔思ったことと同じことを話していた。結局、彼は二番で京大理学部に残合格した（と言われているが真偽は不詳である）。さて、文転して、どうするか。何か理系的なことができそうなところがいいな、数学が入試にある方がいいな、と思い、阪大人間科学部にした。ずっと理学部に行くつもりだったので、文学部には少し興味があったが、文学を生涯の仕事にするつもりはなく、教育学部にはほとんど興味がなく、法学や経済学にはなおさら興味が持てなかった。

かつての阪大自体が、保守的な他の帝大とは違い、長きにわたり新種の気風に富む前衛的な大学であったが、当時の阪大人間科学部も、まだ前衛的な学部であった。今でこそ阪大の人間科学部はこの種の学部の老舗、総本家と見られているが、当時は海のものとも山のものとも分からぬ得体の知れぬ学部であった。心理学、行動学、社会学、哲学、教育学、人類学、文化人類学など人間にかかわる諸科学を結集してできた学部で、日本全国の気鋭の優秀な研究者が切磋琢磨していた。

何よりも、今の人間科学部と違う点は、当時は多くの教員が「人間科学とは何か」という自問自答を真摯に繰り返していたことである。「人間」とか「総合」とかつく学部（研究科）は所詮寄せ集め、ということではなく、形成系の森昭教授（教育哲学）、扇谷尚教授（教育技術学）、行動系の前田嘉明教授（行動学）、社会系の徳永尚教授（人間科学基礎論）など草創期の高名な教授たちは、残された書物などでも多くをその考察に割いている。多くの講義や演習などでも新生学部のアカデミック・ディシプリン確立への熱気を感じることができた。

さて、私は漠然と心理学がしたいな、と思っていた。実験心理学と臨床心理学があり、多くの大学では文学部に実験心理学、教育学部に臨床心理学があったので、入ってから後悔することが多いとよくいわれていた。阪大人間科学部（略して人科＝じんか、と呼ばれている）には臨床も実験も両方あり、浅い知識で入学前に細かく進路を決定するのはやめて、入ってから決めようと思っていた。入試は共通一次の方はさっぱりであったが、二次試験の英語と国語がかなりでき、幸い現役で合格した。阪大は京大・神大と違って、苦手の古文がなかった（擬古文はあった）のが幸いだった。

当時の阪大を受けるに当たって忘れられないのが、元総評議長で阪大工学部OBの太田薫氏の次の言葉である。

・・・社会に出てからはガリ勉の東大出には負けなかったよ。人望を集めるのは阪大のように人間くさい場所で勉強したリーダーなんだと思うね。（大学総合研究シリーズ企画編集委員会編『大阪大学＝総合研究 その歴史・学生生活・就職先・入試』リクルートの207頁収録のインタビュー「わが母校を語る」より）

なお、この『大阪大学＝総合研究』のシリーズは旧七帝大や東工大、一橋大、早慶、関関同立など27大学に関して詳細なレポートをまとめたもので、われわれより上の時代の『赤本』や『傾向と対策』のような入試対策のみの書物とは違い、入試以外にもカリキュラム、教授陣等の教育面、アルバイトやクラブなどの学生生活面、就職状況についても豊富な記述があり、われわれの世代は皆ぼろぼろになるまで熟読したものだ。編集委員に高等教育研究の第一人者といわれる天野郁夫氏が入っておられるのが、従来の入試一辺倒の大学紹介ものとは異なる要因であろう。

さて、石橋（教養課程）、吹田（専門課程）を通じて大学時代は遊び呆け、他の悪友同様に、語学と体育以外はほとんど出席せず、出席したとしても最後列で（ばれない程度の）内職、私語をしていた。専門科目もいくつかあり、われわれの頃は、「人間科学の諸問題」「数学（線形代数が中心）」が一年からあった（現在はないようである）。「人間科学の諸問題」は新入生を学問へ動機づける、現在で言う「転換科目」のはずだが、先輩達から「あれは『人間科学のしょーもない』だよ」と聞いていたとおり、「何でこんな学部に入ったのか」とゲンナリするようなくだらなさであった。（ちなみに「しょーもない」とは関西弁で「くだらない」ということ）一度だけ面白かったのは、行動学の高名な教授が短期記憶と長期記憶について語っている途中で、ヘルメットにマスク姿の法政大学の学生がズカズカと入ってきて、授業をしている先

生を押しつけ、演説を始めたことであった。古き良き学生運動をみる思いで、印象に残っている。ちなみに、筆者の入学時は学生運動の残り火がまだほんの少し学園に漂っていた時期で、入学式前のオリエンテーションの時に生協の組合員証を作りに行くとき、中核派が「安保反対！ 革マル殲滅！」と叫んでジグザグデモをするのを見て「大学にきたなー」と実感した。また授業時間を割いてデモに出かけていく友人もいたし、一度だけだが、機動隊が学内に入ってデモ隊と衝突したシーンも目撃した。筆者の時代に、デモに参加するのは、暇つぶしか遊び・スポーツ感覚かによるものであり、イデオロギーに共鳴するという腹の据わった奴は少なかった。イデオロギーに「シラけて」しまった世代なのだ。

案の定、遊びすぎがたたって語学の単位を落としまくり、二年後期は外国語の授業を週8コマもとることにになり、「大阪大学外国語学部の学生さん（外国語学部は阪大にはない）」と同級生からバカにされていた。単位をとりやすいという評判のフランス語クラスには、まじめな女子が多く（学部全体の三分の一が女子だったが、フランス語のクラスでは半分が女子）、私は、いまや某大学で准教授になっている悪友共々、可と不可ばかりっており、二人揃って「カフカ」と嘲笑された。何とか吹田の学部へぎりぎり（もしもう一つでも単位を落とせば留年という実にきわどい状況で）進学がなかったが、心理学コースへ進むためには必修の「心理学実験・測定」という授業を落としてしまった。「社会思想史」という授業も落とし、社会学コースに進むこともできず、唯一通ったのは、実にいい加減に受けていた「教育科学」だけだった。

つまり、教育学コースへ行くことが自動的に決まってしまったのだ。しかし、教育学には何の興味もなかったので、困り果てた。思案の末、戦後日本史、特に大学生や若者文化の研究ができそうな、教育計画論の講座に入った。「まあ、修士出て高校教師になるし・・・」と思っており、実にいい加減な進路選択という他なかった。そのままずると大学の世界に残り飯を食っているわけであるが・・・。

ところで、阪大に入った時、何より目を引いたのは、私の中学高校時代の同級生と比べて明らかに階層的に低い同級生が多く見受けられたことである。奨学金や授業料の減免など、Z校では紙が張り出されても誰も興味を示さなかった。Z校の同級生は、大学にはいると、みないかにも中産階級のおぼっちゃまという格好で通学していた。阪大の、特に大阪の公立校から来る一部の学生は、みるからに苦学生というか、貧しそうなる格好をしていた。当時「待兼山トラディショナル（通称マチトラ）」と呼ばれた、チェックのシャツにジーンズという格好で、スリッパ履きでぼさぼさの髪でうろつく男子学生と、勉強が出来そうでまじめそうだが、何かあか抜けしない女子学生が

一杯いた。私が入学した頃は半期10万8千円という授業料であったが、まだ私学に比べて破格に安く、裕福な家庭の出身ではないが、まじめな学生が多く集まっていたのであろう。ちなみに私の数年先輩の人達は半期1万8千円とか、当時でも信じられないような安い授業料であった。

また、もう一つ、学食の安さが記憶に残っている。私の年来の愛読書雁谷哲作・花咲アキラ画『美味しんぼ』第11巻（1987年）第5話「トンカツ慕情」にトンカツをめぐるエピソードが出てくる。アメリカで大成功を収めた富豪が、貧乏だった青年時代にチンピラに絡まれ痛めつけられていたところを、トンカツや経営の夫婦に救われ、トンカツをご馳走になる。そしてその貧乏な青年に妻が「勉強してえらくなって頂戴よ」というと、夫が「なあに人間そんなにえらくなるこたあねえ、ちょうどいいってものがあなあ。いいかい学生さん、トンカツをな、トンカツをいつでも食えるくらいになりなよ。それが人間えら過ぎもしない、貧乏過ぎもしない、ちょうどいいくらいってとこなんだ」と励まされる。その後成功したこの富豪は、トンカツ屋の店をだまし取られた夫婦に三十年ぶりに再会し、かつてのお礼にトンカツ屋を店ごとプレゼントするという美談であるが、先の夫のせりふが今でも耳に残って離れない。今、筆者は「トンカツをいつでもくえるくらいに」なっているのか。また筆者以外の働く人たちはどうなのか。

阪大豊中キャンパスの図書館下の学食ではトンカツ定食（みそ汁・ご飯・サラダ付き）が320円であった。トンカツは高級品で贅沢という先入観を持っていたのだが、定食の中ではトンカツ定食が最も安く、いつもこればかり食べていた。天ぷらうどん（そば）100円、カツカレー170円に安く、ありがたかったのを覚えている。授業料でも福利厚生でもかつての国立大学は、所得階層にかかわらず実に利用しやすい場所だったように思う。近隣にも「天鳳」という中華料理の店があり、学生向けということで超大盛にしたラーメンやチャーハンが他の店の並盛よりやすく食べられた。気前がよすぎて潰れてしまったが・・・。

とまれ、実に面目ないという他ないが、進路選択に関して、少なくとも筆者はえらそうに「目的意識もなく大学（院）に来るな！」といえない。就職に関して、ただ漠然と教員になりたいという希望は持っていたが、そのために何か特別な努力をすることもなく、現実には、結局のところ教員免許さえ取り損ねている（学生時代に一体何をしていたのか、自分でも理解できない）。とにかく大学と名のつくところに入れば、多くの者は何も考えずとも、何とかなるといえるのか、腰の重い者でも周りが動いてどこかに決まってしまうという時代だったのだ。

筆者はバブルの絶頂期に大学を卒業した。最初から大学院に進学するつもりでいたため、就職活動はいっさいしなかったが、同級生達の就職活動を見ていると、それこそものすごいものがあった。ひなびた温泉旅館を一週間借り切って内定者を（他社と接触しないように）そこに缶詰にして、コンパニオンなどを集めてひたすら宴会をするなど、豪遊に次ぐ豪遊で、友人達が就職活動をすればするほどみるみる太っていく（良いものを先輩のおごりで食べさせてもらっている）のが目に見えて分かった。筆者でさえも、就職活動の資料は次から次へと（頼みもしないのに）送られてくるわ、先輩からしつこく就職活動の一環だということで「会って話を聞け」といわれ出かけていくと、分厚いステーキをご馳走になりながら四方山話をするばかりということが頻繁にあった。会うだけでも採用活動をしたという実績になるのだと言われた。就職する連中から「大学院行くの？あほやな」とさんざん言われた。大学院への進学は「入学」ではなく、「入院」だから、進学するものは、入学者ではなく「入院患者」と呼ばれ、「どこか変な人」「一般企業に就職できない人」というイメージで見られた。

ただ、言い訳めくが就職活動こそしなかったものの、大学院入試の準備だけはものすごくした。専門科目、教育学一般、フランス語、英語と四科目に面接があったのだが、このときは生涯で一番自主的に勉強した時期だと思う。

思えば、高学歴者はすでに1980年代から過剰になっており、ただそれが一時的なバブルによって隠蔽されていただけなのではないのか。そしてバブル崩壊は、高学歴者過剰の実態をあからさまにただけであり、教育過剰の下地は1980年代に作られていたのではないのか。

（以下、続く）

What does “ career ” mean for youth(vol.2) ?

Kenshi YAMANOUCHI (Associate Professor, IPHE, Kobe University)

The purpose of this paper is to examine what “ career ” or “ career education ” means for youth.

And in this vol.2, I reflected the history of our generation and myself compared with so-called “ lost generation ” . I have argued quite unique character of our generation which makes sharp contrast against “ lost generation ”